
—みんな違うよだからいい—

世界の子どもと教育を考える

シネマ上映会

第1章 プロジェクトの概要

1. プロジェクトの名称および活動目的

名称

—みんな違うよだからいい—

世界の子どもと教育を考えるシネマ上映会

活動目的

人権問題や児童労働、性差別といった様々な教育問題を題材とした映画を多くの人に鑑賞してもらうことにより、再度教育の在り方や、重要性について考える機会を持ってもらう。

また、映画鑑賞を通して、世界の子どもたちの状況を知ってもらうことで、世界の問題に目を向ける人を増やす。

2. 代表者および構成員

・代表者

東郁弥	教育学専攻	4回生
高桑詩乃	体育領域専攻	3回生
村田元輝	英語領域専攻	3回生

・構成員

青井紫恩	英語領域専攻	3回生
伊豆賀真大	英語領域専攻	3回生
森遥平	英語領域専攻	3回生
妹尾花菜子	教育学専攻	2回生
川端日奈	家庭領域専攻	2回生
増田薫	英語領域専攻	1回生
横井里香	英語領域専攻	1回生
中川和晃	英語領域専攻	1回生
中村文香	家庭領域専攻	1回生

村澤良佑	英語領域専攻	1回生
山下真衣香	幼児教育専攻	1回生
山田佑樹	英語領域専攻	1回生
吉田芽衣	英語領域専攻	1回生
田中魁人	教育学専攻	1回生
鈴木紗也	家庭領域専攻	1回生

3. 助言教員

井谷恵子先生（体育学科）

第2章 活動内容

1. 第一回映画上映会

(1) 上映作品について

「世界の果ての通学路」

世界の子どもたちが危険を冒しながら学校へと通う様子を写したドキュメンタリー映画である。世界において教育がどれだけ価値のあるものとされ、重要視されているのかを知ることができる作品となっている。

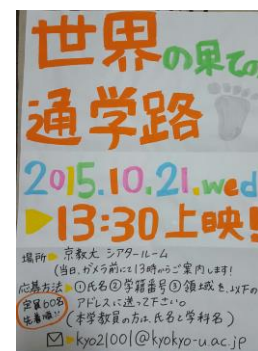
(2) 日時および広報活動について

広報期間：2015年10月9日（金）

～10月21日（水）

上映日時：2015年10月21日（水）

13時30分上映開始



2. 第二回映画上映会

(1) 上映作品について

「世界がもし百人の村だったら」

書籍「世界がもし100人の村だったら」をもとに作られたドキュメンタリー映画。

児童労働、奴隷、ごみ山で働く子どもなど日本では考えられないような子供たちの現状

を知ることができる作品である。

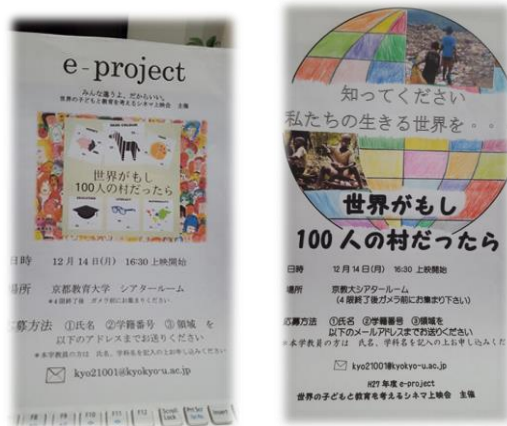
(2) 日時および広報活動について

広報期間：2015年11月16日(月)

～12月14日(月)

上映日時：2015年12月14日(月)

16時30分上映開始



第3章 結果や成果など

1. 第一回映画上映会における成果

映画鑑賞後、参加者にアンケートに回答してもらった。アンケートの結果、多くの参加者が映画の内容に興味を持ったことが分かった。また、自分たちがとても恵まれていることや、日本での生活を当たり前だと思っていけないという意見が聞かれ、参加者が自分の生活と世界の子どもたちの生活を比較することで、改めて自分の置かれている環境のありがたさに気づくことができたと考えられる。

また、発展途上国への支援の在り方として、金銭的援助や物資支援だけでなく、自分たちがまず世界の現状を学び、興味を持っていくことが大切だという回答が得られた。このことから、このような映画鑑賞会を行い、より多くの人に世界の現状を知ってもらうことが重要性であると分かった。

2. 第二回映画上映会における成果

(1) 前回の反省から

第一回上映会の反省を生かし、まず広報を

早く始めることにした。また、ポスターやビラなどもすべてカラーにするなど、人の目を引く工夫を行った。

次に、プロジェクトメンバーで一度集まり、プロジェクトの目的を再確認した。このプロジェクトを行うことにどのような意義があるのか、自分たちがどのような意識でこのプロジェクトに臨むのかということを含んで共有した。そうすることで、プロジェクトメンバーの広報活動にも力が入り、第一回上映会よりも多くの参加者を募ることができた。

そして、より多くの人に参加できるように、上映する曜日、時間を考えた。学生だけでなく、本学の職員の方にも参加していただくため、会議の多く入る水曜午後は避け、第二回上映会は月曜日の16時30分からとした。このことによって、前回本学職員の方の参加はなかったが、第二回上映会では何名かの職員の参加があった。

(2) アンケートより

第一回上映会と同様参加者にはアンケートに回答してもらった。アンケートの結果、ほとんど全員がこの映画の内容に興味を持っていた。映画を見た感想としては、世界の子どもたちの現状がこのような状態だと初めて知った、ショッキングだった、自分たちが恵まれていることに気付いたなどの声が聴かれた。また、映像で見ることで、より深く知ることができた、自分ができていることを子どもたちに伝えていきたいと思った等、映画を見ることで、今持っている知識をより深めることができると考えられ、将来、教員になったとき、また子どもたちに伝えなくてはと思えるようになると考えられた。一方、ドキュメンタリー映画としてはナレーションが多すぎる、行われている対策についてが分からないなどの感想もあったため、上映作品の選択をもっと慎重に行う必要があると思われた。

発展途上国への支援については、前回の上映会と同じように、自分たちがまず世界を知

り、それを広げていくことで、支援団体などがより活発に活動できるようになるのではないかという意見が聞かれた。知ることが大切、まず知る、知って他の人に広めていく等、自分が知ること、周囲に自分たちが恵まれていることを知ってもらったり、世界に目を向けてもらったりできると考えている人が多いと思われた。また、知るだけではなく、自分が実際にできることがないかと考えている参加者も多くいた。フェアトレードを優先する、寄付をする、募金を募るなど自分たちが始められることから、やってみることが大切だと映画を見て思ったようであった。

第4章 まとめと反省、今後の展望など

1. 第一回映画上映会の反省

(1) 参加者意見から

参加者には、自分が恵まれていることを再認識したり、これからの自分の学びの意欲につながったりするなどの意識の変化があった。

しかし、参加者の意見から、映画の構成が単調すぎるといった声があった。今後、映画の選択においてどのような映画が効果的であるかを考えていく必要がある。

(2) メンバー反省会から

広報期間が短すぎたため、ほとんど参加者がいなかったことが一番の反省となった。また、自分たち自身がプロジェクトの目的をしっかりと理解できていない部分があったことも見えてきたため、今一度、自分たちが何をしたいのかそれぞれが考える必要があると思われた。

2. 第二回映画上映会の反省

(1) 参加者意見から

第一回上映会と同様に、参加者は自分たち

がとても恵まれていることに気付いたり、周囲に広めたいと思ったり、知ることから始めようと感じていることが分かった。

しかし映画の構成が、十分ではなかったり、実際どのような支援が行われているのかが分からなかったりといった声も聞こえた。映画の構成についてメンバーと相談したり、その国の情勢や支援団体の活動も合わせて知ってもらうことが必要であると思われた。

(2) メンバー反省会から

前回よりも早くから広報活動を行ったことで、参加者が増えたこと、教員の方にも参加していただけたことが、大きな変化だと感じられた。しかし、もっと多くの人に参加してもらうにどうしたらいいか、考えなければならなかった。また、1, 2回だけ行っても意味がなく、何度も繰り返し上映会を行うことで、少しずつでも世界に目を向けてくれる人を増やしたり、将来教員になったとき、子どもたちに、伝えようと思ってくれる人を増やしたりしていくことが大切だと感じた。

今年度は、世界の子どもたちを取り扱った映画を選んだが、日本の貧困格差や人権に関する映画を上映することで、より問題を身近に感じてもらうことも必要ではないかと考えられた。

付録

アンケート調査の質問内容について

- 1 映画を知っていたか
- 2 映画の内容に興味を持ったか
- 3 今回の企画をどのようにして知ったか
- 4 発展途上国の子どもたちの教育を改善するため、私たちがどのように関わっていくことができるか
- 5 映画を見た感想

第一回上映会アンケート結果

□参加者（9人）

Q1, 「世界の果ての通学路」という映画を知っていたか

はい・・・1人 いいえ・・・8人

Q2, 映画の内容に興味を持ったか

もった・・・・・・・・・・4人

少しもった・・・・・・・・5人

あまりもたなかった・・・0人

もたなかった・・・・・・・・0人

Q3, 今回の企画をどのようにして知ったか

ポスター・・・・・・・・2人

ビラ・・・・・・・・1人

三角柱ポスター・・・0人

知人から・・・・・・・・7人

その他・・・・・・・・0人

Q4, 発展途上国の子どもたちの教育を改善するため、私たちがどのように関わっていくことができるか

- ・根本的にはその国の生保がしっかりと教育にお金を使っていくことでしか改善していかない。世界規模で見たときの国と国との間の貧富の格差問題や日本の消費社会の裏にある途上国の様々な犠牲や影響について多くの日本人が知ること
- ・国際的な機関を通して経済的な支援をする。留学の支援をする。しかし、教育を受けたことで故郷を離れるというのは残念。
- ・寄付金を出したりすることも大切なことかもしれないが、このような環境下で通う子どもたちのことを知るのが大事だと思う。
- ・募金や鉛筆を渡す。
- ・教育について国際的にも興味を持ち、手助けできることを考えていきたい。
- ・インターネットを使った教育（ネット環境を整えることから）
- ・募金、使える物のリサイクルなど
- ・見て学んで伝える。
- ・無駄遣いをなくし、発展途上国への支援をもっと活発にする。

Q5, 映画を見た感想

- ・自分が今まで過ごしてきた環境は本当に恵まれてきているのだなと思いました。当たり前なのが当たり前ではない子どもたちの多さにびっくりしました。
- ・大変だと思いました。だからこそ学校が意味あるものになっているのかなと思った。
- ・自分が恵まれていることを強く感じた。生活ぶりにも強い興味深いものを感じた。自分にはここまで

のやる気が少ないと感じ、甘えているなど思った。

- ・学校に行くために 2 時間強かけて困難な道に行くのに比べ、私たちはすごく恵まれているんだと感じた。
- ・おもしろかったです。
- ・子どもたちは困難な状況でも一生懸命学校に行ってるから、当たり前のことと思っはいけないと思った。
- ・教育の支援はもちろん、教育を受けた子どもたちが、自分の故郷でその力を発揮できるように生活環境の支援もしなければならない。彼らがそれぞれの夢をかなえられるように教育の力に期待したいと思う。
- ・私はケニアに協力隊として 2 年住んでいたのて、象にやられてしまう子どもの姿がリアルに思い浮かんで心が痛かったです。最後のインドの男の子が言っていたように、学校に行くことを許してくれる親をもった子どもは恵まれているという現実があるなあと改めて思いました。

□メンバー (10 人)

Q1, 「世界の果ての通学路」という映画を知っていたか

はい・・・4 人 いいえ・・・6 人

Q2, 映画の内容に興味を持ったか

もった・・・・・・・・・・6 人

少しもった・・・・・・・・・・3 人

あまりもたなかった・・・1 人

もたなかった・・・・・・・・・・0 人

Q4, 発展途上国の子どもの教育を改善するため、私たちがどのように関わっていくことができるか

- ・知識を得てもらうために教育ボランティアとして現地に行く
- ・大金を送って補助ができるのが得策だが、私たちは教育者の立場としてこの恵まれた環境で精一杯頑張ろうと思った。
- ・自分もそうだったようにまずは知ることが大事だと思う。現状を少しでも知ること。知らずに改善などできないと思う。そうして自分たちで考えて、個人それぞれが思う支援、行動を取ればよいと思う。
- ・教育現場に将来立つものとして、自分がどうこうするよりも、積極的に関わっていってくれるような生徒を 1 人でも育てることができればいいと思う。
- ・世界の事情を知る必要があると思う。
- ・教材等を送る
- ・募金やボランティア、小さなことからコツコツと。
- ・意志のある人が NPO に入って活動すればよい。日本の学校教員でも可能である。
- ・募金活動、教育支援など。
- ・まずは周りの人に知ってもらうこと。

Q5, 映画を見た感想

- ・勉強できることを当たり前と忘れてしまっている自分に気付くことができた。
- ・夢に向かうことの大切さ，勉強することの大事さを知りました。
- ・勉強のモチベーションが上がった。
- ・この映画は3回目になるが，過酷な環境で学校に通う彼らを本当に尊敬する。
- ・国は違っても当然そこには生活があって，学校へ向かっている子たちがいるんだと再認識した。国ごとの校舎などの格差が深い問題だと感じた。
- ・それぞれに夢を持ち，意欲的に学習しようという姿勢は日本人の学ぶべき点だと思った。
- ・教育を受ける権利を大切にすべきだと思いました。もっともっと勉強を頑張ろうと思います。
- ・改めて自分のいる環境が恵まれているなと感じた。彼らにない物を自分も持っているけど，自分たちにはないものを彼らは持っている気がした。
- ・まだまだ知らない世界があると感じた。
- ・単調で少し眠かった。

第二回上映会アンケート結果

□参加者（12人）

Q1, 「世界がもし100人の村だったら」という映画を知っていたか

はい・・・7人 いいえ・・・4人 無回答・・・1人

Q2, 映画の内容に興味を持ったか

もった・・・・・・・・・・10人
少しもった・・・・・・・・・・2人
あまりもたなかった・・・0人
もたなかった・・・・・・・・・・0人

Q3, 今回の企画をどのようにして知ったか（複数回答）

ポスター・・・・・・・・・・0人
ビラ・・・・・・・・・・2人
知人から・・・・・・・・・・7人
その他・・・・・・・・・・6人（京教メール, 教授から）

Q4, 発展途上国の子どもたちの教育を改善するため、私たちがどのように関わっていくことができるか

- ・世界にこのような子どもたちがいることを知り、広めていくことが大切だと思う。たくさんの方が知ることにより、教育環境を間然するための機関がより活発に活動できるようになればいいと思う。
- ・まず知ること、考えること。
- ・まず知ろうとする努力が大切な第一歩だと思う
- ・とりあえず、「save the children」と「ユニセフ」に募金
- ・募金などの金銭的援助、フェアトレードを優先する。
- ・募金や寄付はもちろん、知ることだけでも大きな意味があると思う。
- ・次世代の子どもたちに、見たり、聴いたりさせることで伝えていく。子どもの労働についてもっと知らないといけないなと思った。
- ・資金でしょうか。必ず彼らに届くような方法があれば、支援したいと思いました。
- ・自分たちも今を精一杯生きること。
- ・実際に行く、学生だけでなく、国やその他にも伝えていく。自分で知り、自分の口で伝える。
- ・現状を子どもたちに伝えること。自分の身の回りのできることを考える。知らないままではなく、知っていることが大切と感じる。

Q5, 映画を見た感想

- ・また、このような機会があれば参加したい。
- ・何度見ても心にきます。
- ・世界は広く自分たちの生きている環境は狭いと感じた。
- ・これほど世界の子どもたちが深刻な状況にあるということを知ることができました。教育に関しても求めてやまない子どもたちと、環境があるのに拒否する子どもたち、確かに日本の恵まれすぎた環境

の中で甘えている自分が何かできないかと思っています。(教員)

- ・子どもたちに見せたときは、見たり学んだりした時間と同じくらい、自分たちの生活を振り返らせてあげたい。「生きる力」とは何なのか。
- ・ある意味異世界と言うか、自分とは環境が違いすぎて、いろんな意味でショッキングでした。良い勉強になりました。
- ・世界の現状を知って、自分は本当に恵まれた環境に思った。また、自分を支えてくれている人たちに改めて感謝しようと思った。
- ・子どもの現状を伝えてくれているけど、それに対してどのような取り組みを試みているか、逆にどうしてこの問題が起きているか、社会的な要因についての説明が全くないのは仕方ないことなのか？

(教員)

- ・ドキュメンタリーとしてはナレーションが語りすぎで、問題の迫り方は浅くて良い出来とは思いません。(教員)
- ・知ってはいたが衝撃的だった。
- ・学校の授業などで何回かこのような映像を見たのですが、自分のことでいっぱい暮らしていくうちに、発展途上国の子どもたちが苦勞していることなど忘れて、わがままや不満ばかりで暮らしている自分が恥ずかしくなりました。自分にできることは微力ですが、まずは知り、伝えていくことが大切だと思いました。
- ・知っていることが映像を見ることでさらに深まった。今、自分でできることを子どもたちに伝えていく。

□メンバー (9人)

Q1, 「世界がもし100人の村だったら」という映画を知っていたか

はい・・・5人 いいえ・・・4人

Q2, 映画の内容に興味を持ったか

もった・・・・・・・・・・4人

少しもった・・・・・・・・5人

あまりもたなかった・・・0人

もたなかった・・・・・・・・0人

Q4, 発展途上国の子どもたちの教育を改善するため、私たちがどのように関わっていくことができるか

- ・ボランティアや寄付
- ・募金, 知る事。
- ・募金や現状を知る事。
- ・実際に現地に行くこと。資金を送る事。
- ・まずは、知ることが大切だと思う。直接関わる事なんてたぶんだらうから、募金とかで間接的に関わるべきだと思う。
- ・映像を通して現状を知る。

-
-
-

Q5, 映画を見た感想

- ただただ同情やかわいそう、大変そう、といった気持ちが沸き起こるばかりで、そんなことを思ってしまう自分に嫌気がさしました。どれだけ考えても明日には自分の境遇の中で楽しんでいる自分がいるだろうと思います。
- 世界の子どもたちの現状を再確認できた。
- この映画を見て「かわいそう」なんて一言でまとめるのは絶対にいけないことだと思った。自分が直接この人たちに何かできるなんてことは（おそらく）ないのだろうけど、まずは、知ることが大切だと思った。
- 「普通」が「普通」ではないということを改めて知った。
- 何もできないことがない。何かしてあげたい、でも何もできない。
- 私がおなかいっぱいーってごろごろしている間も、何も食わずに働いている子どもがいることを改めて見て、改善にはならないけれど、自分の怠惰な態度を見直そうと思った。
- 今の日本はとても裕福で、毎日ごはんが食べられる幸せを噛み締めなければならないと思いました。彼らのご飯にありつけるまでには、長い時間と労力がかかることをちゃんと知っておくべきだと思いました。